

月例研究会（2008年7月23日）

社会学の領域・再論

——社会学テキストをめぐって

野村 一夫

これからの日本の社会学テキストに必要なことは何だろうか。つまり「テキスト革命」（わかりやすいテキストのラッシュ）の次に来るものは何か。私は次の二点だと思う。

第一に、ディシプリンの知識空間としての標準化。テキストはそのときそのときの研究の中間総括としての意味を担うが、現在は21世紀標準が必要である。とくに1990年代から2000年代にかけての世界的な研究動向をフォローしたものが必要である。第二に、社会学的公共圏の土台となるテキスト。社会学では、ファシリテーター的な本は比較的好く出ている。そうではなくて、議論の土俵を提供するようなりファレンスが必要である。この点では、ネット時代に即した仕掛けも考える必要があるだろう。

しかし、伝えるべき社会学像がはっきりしなくなっている。というのは次のような問題があるからである。

第一に、学際的領域研究の隆盛がある。環境学、国際学、平和学、情報学、女性学、障害学、カルチュラル・スタディーズ、科学技術と社会の研究（STS）、音楽史など、かなり社会学と重なる研究が学際的に展開している。そこには社会学も参加しているのではあるが、見方を換えれば「社会学の終わり」（社会学の発展的解消）の局面が来ているのではないかと考えられる。

第二に、グローバリゼーションをどう取り入れるか。市民社会を対象として成立した社会学であるが、じっさいには国民国家中心のアプローチであった。比較社会学として世界社会を扱うようになり、さらに今日では地球社会を（複数形ではなく、ひとつの社会として）対象とするグローバル社会学が提案されている。

第三に、社会のフロンティアが拡大している。たとえば、ネットワーク社会、同性愛結婚、ステップファミリーなど、これまで「社会」の範囲では「その他」扱いされてきたテーマが大きくなっている。これは「残余概念の逆襲」または「周縁の中心化」である。「残余」「周縁」「未知」だったテーマが、パラダイム変換を伴うような重要なテーマとして中心化しているのである。

第四に、社会学の内部においても多元的パラダイムによる問題の拡散が生じている。一方では、世界システム論が資本主義経済全般を扱うべきだと主張している。他方で、エスノメソドロジーは会話分析の必要性を説き、人びとのささいな会話の一コマを微細に研究している。

もちろん、以上のような動向はずいぶん以前から存在した。私はこれを「脱領域の知性」として説明してきたが、21世紀の現在では社会学の発展的解体も想定しなければならない状況である。肥満化したテーマ群をどう取りまとめていくか——ジンメルやデュルケムが直面した「社会学の領域」問題が、かれらの一世紀後に再び生じているのである。

ディシプリンとして何を伝えるべきか。社会学の領域を再考する作業が必要である。

（のむら・かずお 國學院大学教授、大原社会問題研究所研究員）